

厚木市史たより 第31号

令和6年(2024)9月30日

題字は渡辺崋山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

「相州星降梅」を刻む

本阿弥光悦像

厚木市史編集専門委員会委員 山田不二郎

はじめに

本阿弥光悦は桃山時代から江戸時代初期に活動した能書家・工芸家である。永禄元年(一五五八)、刀剣の鑑定、研ぎ、拭いを家業とする京都の本阿弥家に生まれた。光悦は家業のほか、書・陶芸・蒔絵など様々な分野の創作に取り組み、舟橋蒔絵硯箱(国宝)など多くのすぐれた作品を生み出した。元和元年(一六一五)、光悦は徳川家康から洛北鷹峯(京都市北区)の地を拝領し、ここに一族や多くの工匠を集めて芸術村を作り、創作活動を続けた。寛永十四年(一六三七)、八十歳で死去。



図1 本阿弥光悦坐像と像裏面の銘
「特別展本阿弥光悦の大宇宙」より引用

令和六年一月から三月の約二か月、東京国立博物館で特別展「本阿弥光悦の大宇宙」が開催され、筆者も鑑覧の機会を得た。展示の導入部は光悦の人物像を知る作品群で、その第一は「本阿弥光悦坐像」であった。江戸時代、十七世紀のもので、光悦の孫である本阿弥光甫作と伝えられる。図録によると、像高二二・五センチ、横幅二二センチの小さい木坐像であるが、光悦を直接知る孫の手による作品として貴重な彫像であると評されている。ここで筆者の目を釘付けにしたのは傍らの坐像裏面に刻まれる銘の写真(図1)であった。そこには「以相州星降梅造」と刻まれているのである。「相州星降梅」は本市依知地区の日蓮宗寺院に伝わる奇瑞伝承に由来するものと考えられる。この梅樹で作ったという彫像が存在するということが自体、非常に驚くことであったが、同時に、光悦・本阿弥家と市域の日蓮宗寺院に、何か縁(ゆかり)があったのである。うかと疑問が湧いてきたのである。

一 日蓮の相州依知逗留と星下りの奇瑞

日蓮の依知逗留 日蓮宗(法華宗)の開祖日蓮は承久四年(一一二二)安房国に生まれた。同国の清澄寺(千葉県鴨川市)で天台宗を学んだのち、鎌倉・比叡山などで各地で修行を重ねた。仏教の根本が法華経にあると悟った日蓮は建長五年(一一五三)清澄寺に戻り、「南無妙法蓮華経」の題目を主唱し布教活動を開始した。日蓮は念仏宗・禅宗など他宗を邪教として厳しく批判し、前執権北条時頼に「立正安国論」を呈上して法華経信仰の必要性を説いた。幕府からはこれを忌避され、伊豆配流などの弾圧を受けたが、日蓮はこれに屈せず布教活動を続けた。文永八年(一一七二)九月十二日、他宗批判により訴えられた日蓮は幕府に捕えられ、龍口(藤沢市)で処刑されそうになったが、これを免れて佐渡流刑となり、佐渡国守護大仏宣時の預かりとなった。そして翌十三日、鎌倉から同国守護代本間重連の館のある相模国依智郷に送られ、佐渡に向け出立する十月十日までの約一か月、ここに逗留した。

星下りの奇瑞 星下りの奇瑞は本間館に到着した十三日夜の出来事と言われている。日蓮が支援者の一人四条金吾(頼基)に送った九月二十一日付書状(『厚木市史』中世資料編文献198)に、「三光天子の中に、月天子は光物とあらはれ、龍口の頸をたすけ、明星天子は四五日已前に下て、日蓮に見参し給ふ」と、二度の奇瑞があったという記述がある。三光天子は日天子・月天子・明星天子の総称である。それぞれ太陽・月・星の尊称で、法華経を守護する神と考えられている。一度目は龍口の法難の際、満月のような「大なる光物」が現れたという出来事で、二度目が四、五日前に明星天子が下り立ったという出来事である。日蓮の伝記絵巻『日蓮聖人註画讃』によると、依知本間館に到着した十三日夜、日蓮は月に向けて法楽を行ったあと、今の状況に奇瑞を現すべき月天子が何の兆候もなく、快く澄み渡っていると月天子を責め立てた。すると明星天子と衆星が下り、庭上の梅枝に懸かって光を放つと童子が現れた。童子は日蓮に向い立ち、「我は明星なり」と名乗り、日蓮と語り話した(図2)。警護の兵士は縁より飛び降りて庭に伏し、或いは逃げ隠れた。兵士の多くが離れ去ると俄かに天曇つて大風が吹き、江の島の空は太鼓を打つごとく鳴動した。翌日、日蓮には佐渡流刑が下されたという。この奇瑞伝承は厚木市金田の妙純寺、中依知の蓮生寺、上依知の妙傳寺の日蓮宗三か寺に伝えられている。

厚木市史たより 第31号

令和六年（二〇二四）九月三十日発行

編集 厚木市文化魅力創造課

発行 厚木市

住所 神奈川県厚木市中町三一七―一七

電話 ○四六・三三五・二〇六〇

FAX ○四六・三三三・〇〇四四

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しております。